経済学部の中国語教育に関する一考察

竹 中 佐英子

1．テーマ選定理由

筆者は2011年4月～、東洋大学（以下「東洋」）経済学部（以下「経済」）専任教員として、主に中国語教育を担当している。前任校の目白大学（以下「目白」）では外国語学部中国語学科（以下「C科」）の主専攻中国語、非常勤先の明治学院大学（以下「明学」）では選択必修第2外国語の中国語を担当し、加えてC科のカリキュラム作成を行ってきた筆者から見て、東洋経済の中国語教育には現在、主に2つの問題がある。

1つは、初級の1クラスの人数が30～50人と、日本人大学生がゼロから外国語を学ぶにしてはかなり多いことである。表1-1，1-2は2011年度春学期、初級中国語を学ぶ科目「中国語演習Ⅰ」（以下「中演Ⅰ」）の履修者数を示したものである。「中演Ⅰ」は発音を中心に学ぶ「総合」（以下「中演Ⅰ総」）と、文法を中心に学ぶ「文法」（以下「中演Ⅰ文）があり、国際経済学科（以下「国経」）1年生は2科目共に必修、第1部経済学科（以下1経）と総合政策学科（以下「総政」）は完全選択である。「コース」とはクラス分けのことであり、国経の学生は教務によってコースを指定されるが、国経2年生以上で再履修（以下「国経再」）、1経、総政の学生は自分でコースを選ぶ。5コースだけは2こま共に同一教員が同一教材を用いて行う、学習進度の速いクラスであり、ここで学びたい学生は教務に申請する。

1クラスの人数が多くなってしまう理由は、中国語履修者数の予測が困難だからである。国経1

表1-1. 2011年度春学期「中演Ⅰ総」履修者数

コース	開講曜日・時限	合計	1経	国経	総政
1コース	金曜4限	35人	3人	32人	0人
2コース	金曜5限	36人	2人	28人	6人
3コース	金曜4限	46人	13人	27人	6人
4コース	金曜2限	50人	11人	33人	6人
5コース	金曜5限	35人	0人	34人	1人

表1-2. 2011年度春学期「中演Ⅰ文」履修者数

コース	開講曜日・時限	合計	1経	国経	総政
1コース	火曜2限	34人	4人	25人	5人
2コース	火曜1限	26人	2人	24人	0人
3コース	火曜1限	28人	3人	23人	2人
4コース	火曜2限	43人	2人	28人	13人
5コース	火曜1限	35人	0人	34人	1人

年生は初習外国語（独仏中から1言語）が8単位選択必修であるが、1学年約200人の学生がどの言語を選択するかは年度により異なる。特に中国語の履修者数は中国に関する報道に左右される。前年に東シナ海ガス田開発、毒入り餃子など、マイナスイメージの報道があると履修者が減少し、逆に北京五輪、上海万博など、プラスイメージの報道があると履修者が増加する。しかし、履修者数の増加に伴うクラス数の増加は行っていないため、1クラスの人数は多くなってしまう。成人に対する外国語教育では1人1人に目が行き届く環境が必要であり、中国語を主専攻とするC科では1クラス10人前後、第2外国語の明学でも20人前後で授業をしてきた筆者には、初習外国語を1クラス30人以上で学ばせることにはどうも納得がいかない。

もう1つは、中・上級になると履修者が減少することである。表2は2011年度春学期、中級中国語を学ぶ科目「中国語演習Ⅱ」(以下「中演Ⅱ」)と、上級中国語を学ぶ科目「中国語演習Ⅲ」(以下「中演Ⅲ」)「中国語演習上級」(以下「中演上」)の履修者数を示したものである。国経2年生は英独仏中のうち1年生で履修した1言語が8単位選択必修である。「中演Ⅱ」は「中演Ⅰ」同様、「総合」(以下「中演Ⅱ総」)と「文法」(以下「中演Ⅱ文」)がある。「中演Ⅲ」「中演上」は共に完全選択である。「中演Ⅰ」は計5コースにそれぞれ26～50人ずついるのに対し、「中演Ⅱ」は計2コースに12～25人ずつ、「中演Ⅲ」は1人だけ、「中演上」に至ってはゼロである。

中国語は初級では1クラスを30～50人で編成しなければならないほど履修者がいるのに、中・上

表2. 2011年度春学期中・上級中国語履修者数

科目名	コース	開講曜日・時限	合計	1経	国経	総政
中演Ⅱ総	1コース	水曜4限	12人	0人	11人	1人
中演Ⅱ総	2コース	金曜3限	24人	0人	21人	3人
中演Ⅱ文	1コース	火曜2限	12人	0人	11人	1人
中演Ⅱ文	2コース	火曜3限	25人	3人	21人	1人
中演Ⅲ	なし	金曜3限	1人	0人	1人	0人
中演上	なし	火曜3限	0人	0人	0人	0人

級になると減少してしまうのは何故か？外国語学習は積木式である。中級を理解していなければ、上級を理解することはできない。しかし、上級に当たる「中演Ⅲ」「中演上」の前段階「中演Ⅱ」は選択必修ではなく、履修者も少ない。更にその前段階の「中演Ⅰ」は学習環境があまり良くない。初級中国語を身に付けられぬまま終了し、２年生になると英語へと逃避する学生が少なくない、と考えられる。

中国語の履修者数が多い現状は歓迎すべきである。言語学習適正の高い学生がいる確率が高まるからだ。しかし、現在の学習環境のままでは、選択となる中・上級の履修者は増えないだろう。初級は少人数で授業を行い、きめ細かく指導してしっかりと基礎を身に付けさせる。その中で成果を上げた学生を中・上級迄履修させる。そうやって初めて、国経が標榜する「国際化」や「コミュニケーション能力の養成」を実現することできる。東洋経済の中国語教育は少人数クラスの実現に尽力しなければならないが、それには多方面の理解と長い年月を要する。当面の急務は▽大人数クラスでも全履修者が基礎を身に付ける教育を行うこと▽中国語履修者が学習困難と感じている問題を突き止め、克服すること▽中国語履修者の要望を把握すること――である。

本稿は東洋経済の中国語履修者に対して行ったアンケート調査や試験の結果を分析することを通じて、履修者の現状を把握、分析した上で、中国語教育、初習外国語、カリキュラムに対して提言を行う。

２．調査方法の紹介

２．１．調査対象

本稿の調査対象は東洋経済の「中演Ⅰ総」１コース履修者、「中演Ⅰ文」３・４コース履修者、国経１年生必修科目「ゼミナールⅠA」（以下「ゼミⅠA」）４コース履修者、第２部経済学科（以下「２経」）必修科目「入門演習A」４コース履修者である。表3-1は調査対象を履修科目毎と所属学科毎、表3-2では入学方式毎、表3-3では入学方式がセンター試験利用入試（以下「セ利用」）である学生15人の詳細な内訳を示したものである。なお、国経１年生には「中演Ⅰ総／文」と「ゼミⅠA・４コース」の両方を履修している学生、国経再には「中演Ⅰ総１コース」と「中演Ⅰ文４コース」の両方を履修している学生が含まれるため、合計人数には整合性が無い。

表3-1. 調査対象内訳（履修科目毎、所属学科毎）

履修科目	略称	合計	1経	国経	国経再	総政	2経
中国語演習Ⅰ(総合)・1コース	1コース	35人	3人	24人	8人	0人	0人
中国語演習Ⅰ(文法)・3コース	3コース	26人	3人	21人	0人	2人	0人
中国語演習Ⅰ(文法)・4コース	4コース	42人	2人	23人	4人	13人	0人
ゼミナールⅠA・4コース	ゼミⅠA	29人	0人	29人	0人	0人	0人
入門演習A・4コース	2経	30人	0人	0人	0人	0人	30人
			8人	83人	8人	15人	30人

表3-2. 調査対象内訳（入学方式毎）

入学試験	略称	人数	1コース	3コース	4コース	ゼミⅠA	2経
3教科総合入試	3教科	55人	14人	14人	22人	13人	0人
ベスト2入試	ベスト2	20人	5人	2人	4人	2人	12人
3月入試	3月	5人	1人	1人	1人	1人	2人
センター試験利用入試	セ利用	15人					
留学生入試	留	1人	0人	0人	0人	1人	0人
公募制推薦入試	公募	5人	0人	0人	0人	0人	5人
指定校推薦入試	指定校	29人	5人	5人	9人	7人	9人
付属高校出身	付属校	8人	4人	2人	2人	2人	0人

表3-3. 調査対象内訳（センター試験利用入試で入学した履修者のみ）

	略称	1コース	3コース	4コース	ゼミⅠA	2経
センター試験利用前期3教科	セ3	3人	0人	2人	1人	0人
センター試験利用前期ベスト2	セ前2	2人	2人	1人	2人	0人
センター試験利用中期2科目	セ中2	1人	0人	1人	2人	0人
センター試験利用後期ベスト2	セ後2	0人	0人	0人	0人	2人

2．2．調査実施方法

アンケート調査は2011年4～7月に複数回、記名式で行った。質問項目は中国語学習、大学生活、家庭に関することなど約50項目で、回答は選択肢から選択、あるいは自由に記述させ、回答は履修科目毎、所属学科毎、入学方式毎、期末試験の成績毎に集計した。本稿では全結果のうち、分析に必要なもののみを開示している。なお、アンケート調査は異なる日時に複数回行ったため、調査毎に回答者数が異なっていたり、あるグループに対しては調査を行っていない項目もある。

3．調査結果とその分析

本章では、東洋経済の中国語履修者に対して行った試験やアンケート調査の結果を分析しながら、履修者の現状を把握、分析していく。

3．1．中国語の学習成果

本節では東洋経済の学生の中国語の学習成果を分析し、現在の学習環境の下でどの程度の成果を上げているかを検証する。

表4-1～4は2011年度春学期、持ち込み一切不可で実施した「中演Ⅰ総」1コース、「中演Ⅰ文」3・4コースの期末試験（各100点満点）の平均点を、コースおよび所属学科毎（表4-1，4-2）と、入学方式毎（表4-3，4-4）に示したものである。1コースと3・4コースの平均点を別々に算出している理由は、試験内容が異なるためである。

まず表4-1，4-2を見るに、国経、国経再、総政の平均点は68.7～79点と、10.3点の差の間に収まっているのに対し、1経は1コースが41.5点、3・4コースが81.6点と、40.1点もの差がある。筆者は東洋経済の専任教員から「1経は国経や総政より偏差値が高く、初習外国語の成績も良い」という話を聞いたことがあるのだが、今回の調査結果では所属学科の偏差値と中国語の成績が比例する傾

表4-1．1コース春学期期末試験平均点（100点満点）

1コース	1経	国経	国経再
72.9点	41.5点	78.2点	68.7点

表4-2．3・4コース春学期期末試験平均点（100点満点）

3コース	4コース	1経	国経	国経再	総政
69点	77.7点	81.6点	73.2点	79点	73.9点

表4-3．1コース春学期期末試験平均点（100点満点）

3教科	ベスト2	3月	セ3	セ前2	セ中2	指定校	付属校
76.6点	66.9点	65.3点	82.3点	37.3点	93.8点	80.4点	53.6点

表4-4．3・4コース春学期期末試験平均点（100点満点）

3教科 3コース	3教科 4コース	ベスト2	3月	セ3	セ前2	セ中2	指定校	付属校
67.6点	77.9点	70.2点	71.7点	91.7点	59.3点	77.8点	79.4点	65.1点

向は見られなかった。しかし、1経の履修者は人数が少なく（表3-1参照）、判断するには早急なので、今後も観察を続けて行く。

次に表4-3, 4-4を見るに、平均点が最も高い入学方式は、1コースではセ中2（センター試験利用中期2科目）、3・4コースではセ3（センター試験利用前期3教科）であり、逆に最も低いのは1コース、3・4コース共にセ前2（センター試験利用前期ベスト2）である。セ利用入学者は人数が少なく（表3-2, 3-3参照）、この結果を以って断定することはできないが、セ利用入学者はその種類により学力格差があるのかもしれない。今後も観察を続けて行く。最も入学者が多い3教科、およびベスト2、3月といった東洋の学力考査を経て入学した履修者の平均点は65.3～77.9点である。日本人がゼロから中国語を学び、4カ月間週2こまの授業を受けた後、6～7割得点したということは、及第点をクリアしたというレベルである。コミュニケーション能力の養成が国経のカリキュラム・ポリシーの柱である以上、履修者も教員ももっと成果を上げるよう、更なる努力が必要である。

注目したいのは、共に学力考査を課されない入学方式である指定校と付属校の違いである。指定校は1コース、3・4コース共に79.4～80.4点と比較的高得点であるのに対し、付属校は1コースが53.6点、3・4コースが65.1点と、他の入学方式の履修者に比べて低く、成績良好とは言えない。筆者はC科や明学の入学方式と中国語の成績の関係を考察したところ、指定校と付属校からの入学者は一般入試入学者に比べると成績が良くない、という結果を得ている（詳細は竹中2011.p275）。C科・明学と東洋の共通点は一般入試入学者は中国語学習で一定の成果を上げるということ、相違点は東洋の指定校入学者はC科・明学の指定校入学者と異なり、中国語学習で比較的高い成果を上げるということである。これは東洋の指定校が質の高い学生の獲得に成功していることの表れであり、この伝統は今後も是非堅持すべきである。

3．2．初習外国語に対する認識

近年、東洋経済では中国語の履修者数が独語や仏語に比べて多い。本節では東洋経済の学生の初習外国語に対する認識を分析し、中国語の履修者数が多い理由を考察する。

質問．初習外国語を選択する際、考慮すること

【項目1】当該言語に対する興味

【項目2】当該言語使用地域の文化、経済、政治などへの関心

【項目3】難易度

【項目4】単位取得のしやすさ

【項目5】開講曜日・時限

表5．初習外国語を選択する際、考慮すること（複数選択可）

	1経（8人）	国経（83人）	国経再（8人）	総政（15人）	2経（26人）
項目1	5人（63%）	49人（59%）	4人（50%）	10人（67%）	16人（62%）
項目2	4人（50%）	20人（24%）	0人（0%）	2人（13%）	7人（27%）
項目3	6人（75%）	53人（64%）	5人（63%）	6人（40%）	15人（58%）
項目4	4人（50%）	34人（41%）	5人（63%）	3人（20%）	13人（50%）
項目5	6人（75%）	41人（49%）	3人（38%）	10人（67%）	12人（46%）

表5は「初習外国語を選択する際に考慮すること」を列記し、当てはまるものを全部選ばせた結果である。考慮することの第1位が項目1「当該言語に対する興味」であるのは総政と2経、項目3「難易度」であるのは1経と国経と国経再、項目4「単位取得のしやすさ」であるのは国経再、項目5「開講曜日・時限」であるのは1経と総政である。国経には自由記述欄に「ドイツ語やフランス語は動詞の変化とか覚えるのが大変だから」「中国語は漢字だから見れば意味がわかる」と書いた学生もいる。この結果から、初習外国語を選択する際、選択必修である国経の学生は卒業要件をクリアしやすい言語か否かを重視するのに対し、完全選択である1経、総政、2経の学生は当該言語に対する興味や時間割の都合を重視することがわかる。国経で中国語履修者が多い理由は、独語や仏語に比べて簡単な言語と思われていることによるものであろう。

注目したいのは、項目2「当該言語使用地域の文化、経済、政治などへの関心」と答えた学生がいずれのグループでも半数以下に留まった点である。この結果は、学生が初習外国語の授業を通じて当該言語使用地域の諸事情を学ぼうと考えていないことの表れである。

3．3．中国語に対する認識

中国語は初級では履修者数が多いにもかかわらず、中級には進まない学生が多い。これは履修者が何かに躓くからなのか？あるいは興味を失うからなのか？本節では東洋経済の学生の中国語に対する認識を分析し、履修者の困難点や中国語への興味を考察する。

質問．中国語の授業を受けて身に付いたこと

【項目6】ピンインの読み書き規則

【項目7】簡体字の読み書き

【項目8】中国語の単語の意味、使い方

【項目9】中国語の語順、文法

【項目10】何が身に付いたか、わからない

表6-1. 中国語の授業を受けて身に付いたこと（複数選択可）

	1コース（35人）	3コース（26人）	4コース（38人）	成績上位（30人）	成績中位（28人）	成績下位（40人）
項目6	18人（51%）	10人（38%）	20人（53%）	24人（80%）	11人（39%）	12人（30%）
項目7	26人（74%）	18人（69%）	33人（87%）	26人（87%）	22人（79%）	28人（70%）
項目8	23人（66%）	18人（69%）	24人（63%）	23人（77%）	19人（68%）	23人（58%）
項目9	25人（71%）	17人（65%）	26人（68%）	21人（70%）	20人（71%）	27人（68%）
項目10	2人（5.7%）	0人（0%）	1人（2.6%）	0人（0%）	0人（0%）	3人（7.5%）

表6-2. 中国語の授業を受けて身に付いたこと（複数選択可）

	経済（8人）	国経（68人）	国経再（8人）	総政（15人）
項目6	6人（75%）	31人（46%）	4人（50%）	7人（47%）
項目7	5人（63%）	55人（81%）	6人（75%）	11人（73%）
項目8	5人（63%）	47人（69%）	5人（63%）	8人（53%）
項目9	4人（50%）	51人（75%）	3人（38%）	10人（67%）
項目10	1人（13%）	2人（2.9%）	0人（0%）	0人（0%）

表6-1，6-2は「筆者の中国語の授業を受けて身に付いたと思うこと」を列記し、当てはまるものを全部選ばせた結果をコース毎、春学期末試験の成績毎（上位、中位、下位）、所属学科毎に示したものである。

まず全グループの共通点だが、項目7「簡体字の読み書き」と答えた学生が6～8割に達している。簡体字とは画数を減らした漢字であり、例えば「書」は“书”、「業」は“业”のように書く。現在、中国大陸ではこの簡体字が正書法になっている。日本語は仮名文字と漢字の両方を用いて記録し、かつ簡体字の読み方は日本漢字と大きく異なるので、日本人中国語学習者なら簡体字に敏感になるのは当然である。

次にグループの違いによる相違点を3つ指摘したい。

1つ目は項目6「ピンインの読み書き規則」である。「ピンイン」とは1958年に中国政府が制定した、中国語の漢字音を表すローマ字表記法である。例えば中国語で「私」を意味する語は“我”であり、ピンインでは“wǒ”と表記、「ウォー」のように読む。ピンインはその表記から連想される読み方が実際の発音とはかけ離れているものも多く、例えば“ian”は「イアン」ではなく「イエン」、“zi”は「ジー」ではなく「ツー」のように読む。ピンインは書く際にも規則がある。例えば三重母音“uei”は単独で音節を構成する時は“wei”、前に子音が付く時には間にある“e”を省いて子音＋“ui”と書く。だから子音“k”の後ろに三重母音“uei”が続く時は“kui”と書くので、「クイ」と読んでしまいそうだが、正しくは「クェイ」のように読む。このようにピンインはその読み書きに様々な

規則があるのだが、それは体系的で例外が無く、1度覚えてしまえば未知の中国語漢字音が一目でわかるようになる、非常に便利な学習ツールである。なお、現在出版されている中国語の教材や辞書は全てピンインで漢字の読み方を表記しているので、ピンインの読み書き規則を習得しておかないと、教材を音読することも、辞書を引くこともできない。そこで初級中国語担当教員は皆、ピンイン教育に非常に力を入れているのだが、「ピンインが身に付いた」と答えた学生は成績上位者では80%、経済では75%に達しているのに対し、1コース、4コース、国経、国経再、総政では5割前後、3コース、成績中・下位者では3割台に留まっている。東洋経済の中国語が中級になると履修者が減少する原因は、初級でピンイン学習に躓くことにあることがわかる。注目したいのは「中演Ⅰ総／文」を再履修となった国経再で、このグループは計算上1経、国経、総政の2倍の時間をピンイン学習に費やしていることになるのだが、「身に付いた」と答えた学生が半数に留まっている。すなわち、ピンイン学習に躓くと、再履修になりやすいと言える。

2つ目は項目8「中国語の単語の意味、使い方」、項目9「中国語の語順、文法」である。

表7．中国語、英語、日本語の違い

中国語（孤立語）	英語（屈折語）	日本語（膠着語）
我问他。	I ask him.	私は彼に尋ねる。
他问我。	He asks me.	彼は私に尋ねる。

表7を見よう。中国語は英語のように人称代名詞や動詞が変化を起こさず、日本語のように格を表す助詞を用いることもしない孤立語であり、単語を文中のどの位置に置くかによって文法機能を表す。すなわち中国語学習では、単語の使い方や語順を理解することが非常に重要なのである（詳細は竹中2005b.p135、竹中2005c.p175）。「中国語の単語の使い方や語順が身に付いた」と答えた学生は概ね6～7割いるのだが、国経再だけは項目9「中国語の語順、文法」が身に付いたと答えた学生が38%に留まっている。ピンイン同様、中国語学習の最重要ポイントである語順をあまり理解できなかったことが再履修になった理由であることがわかる。

3つ目は項目10「何が身に付いたか、わからない」である。この調査は4カ月間週2こま中国語の授業を行った後に回答させたが、成績下位者3人が「何が身に付いたか、わからない」と答えている。学習成果を実感できない履修者は成績も芳しくないことがわかる。

以上の結果から、全体の半数程度の履修者が中国語学習の入り口、かつその後の学習の最重要ツールである「ピンイン読み書き規則の把握」で躓いている現状が見える。

質問．中国語の学習技法に対する評価

【項目11】中国語は難しい。

【項目12】発音練習はあまりやりたくない。

【項目13】ピンインは覚えづらい、覚えられない。

表8-1. 中国語の学習技法に対する評価（２択回答）

	１コース（35人）	３コース（26人）	４コース（38人）	成績上位（30人）	成績中位（28人）	成績下位（40人）
項11	16人（46%）	13人（50%）	21人（55%）	11人（37%）	12人（43%）	26人（75%）
項12	19人（54%）	13人（50%）	11人（29%）	11人（37%）	11人（39%）	21人（53%）
項13	19人（54%）	15人（58%）	21人（55%）	８人（27%）	11人（39%）	36人（90%）

表8-2. 中国語の学習技法に対する評価（２択回答）

	経済（８人）	国経（68人）	国経再（８人）	総政（15人）
項目11	６人（75%）	32人（47%）	４人（50%）	８人（53%）
項目12	４人（50%）	28人（41%）	７人（88%）	４人（27%）
項目13	５人（63%）	36人（53%）	５人（63%）	９人（60%）

表8-1，8-2は項目11～13に対して「はい」と回答した学生数をコース毎、春学期末試験の成績毎、所属学科毎に示したものである。

まず項目11「中国語は難しい」と答えた学生が、１・３・４コース、成績中位者、国経、国経再、総政で５割前後、成績下位者、経済では75％に達しているのに対し、成績上位者では37％に留まっている。中国語を難しいと感じた履修者は学習成果があまり上がっていないことがわかる。

次に項目12「発音練習はあまりやりたくない」と答えた学生が、１・３コース、成績下位者、経済では５割台、国経再では88％に達しているのに対し、国経は41％、成績上・中位者は37～39％、４コースと総政では27～29％である。項目13「ピンインはどんなに勉強しても覚えづらい、あるいは覚えられない」と答えた学生が、１・３・４コース、経済、国経、国経再、総政では５～６割、成績下位者では90％に達しているのに対し、成績中位者は39％、上位者では27％に留まっている。この結果は、表6-1，6-2の「ピンインの読み書き規則が身に付いた」と答えた学生が成績上位者に多く、下位者や国経再に少ない現象と重なる。すなわち、成績下位者、国経再など、発音練習を好まないグループほどピンイン学習を困難と感じているのに対し、発音練習を重要と感じている成績上・中位者、総政などのグループはピンイン学習を困難に感じていない、という傾向が見て取れる。筆者はC科や明学の調査でも「発音練習を好まない学生より積極的に参加する学生の方が中国語の成績が良い」と、この調査と同様の結果を得ている（詳細は竹中2008a.p235、竹中2009.p214）。

発音練習（音読）には脳を活性化し、学習事項を理解、記憶しやすい素地を作る効果がある。川島2004.p36～38は「音読すると前頭前野が活性化し、記憶力や空間認知力が20～30％増加する」という実験結果を報告している。筆者は授業開始～10数分間、まず単語一覧表を全員で読み、その後学生１人ずつにも読ませてから練習問題を解くのだが、成績上位者がピンイン学習を困難に感じない理由は、この音読に積極的に参加することで、脳がピンインの読み書き規則、語順などを理解、記憶しやすい状態になったからだと言える。

初級中国語は１クラスの人数が多く、あまり学習環境が良くないが、音読に積極的に取り組んだ履修者は良い成績を修めている。初級中国語教員は基礎をしっかり身に付けさせるよう、できるだけ大量の音読を行うべきである。また履修者にも授業やシラバスを通じて、常に音読の重要性を訴えることが必要である。

質問．中国語に対する興味

【項目14】中国語を学ぶ前、中国語に対して興味が有った。

【項目15】中国語を学んだ後、中国語学習に対して興味を持っている。

表9-1．中国語に対する興味（２択回答）

	１コース（35人）	３コース（26人）	４コース（38人）	成績上位（30人）	成績中位（28人）	成績下位（40人）
項目14	19人（54%）	14人（54%）	19人（50%）	16人（53%）	17人（61%）	18人（45%）
項目15	23人（66%）	21人（81%）	32人（84%）	28人（93%）	24人（86%）	23人（58%）

表9-2．中国語に対する興味（２択回答）

	経済（８人）	国経1（68人）	国経再（８人）	総政（15人）
項目14	６人（75%）	33人（49%）	５人（68%）	８人（53%）
項目15	６人（75%）	53人（78%）	６人（75%）	11人（73%）

表9-1，9-2は項目14～15に対して「はい」と回答した学生数をコース毎、春学期末試験の成績毎、所属学科毎に示したものである。

中国語に対する興味を学習前と学習後で比較すると、経済では全く同じ、それ以外の全グループでは学習後の方が高い（１コースは12％、３コースは27％、４コースは24％、成績上位者は40％、中位者は25％、下位者は13％、国経は29％、国経再は７％、総政は20％の伸び）。中でも成績上位者は93％が「学習後に興味が持てるようになった」と答え、興味の伸び率も他のグループに比べて高い。筆者はＣ科の第一志望および非第一志望入学者の成績を比較したところ、非第一志望で言語

学習適性の高い学生の方が第一志望で言語学習適性の低い学生より中国語の成績が良い、という結果を得ている（詳細は竹中2008a.p234）。すなわち、学習前に興味が無くても言語学習適性が高ければ成果を上げることができ、かつ成果を上げた履修者は中国語に対して興味を持つよう、変化するのである。初級で成果を上げた履修者に対しては、教員側から中・上級迄履修するように助言すれば、更に成果も興味も向上するだろう。

東洋経済の中国語は卒業要件以下のものでもなければ、非主専攻科目以上のものでもない。選択必修でなくなれば、履修しなくなる学生は増えるだろう。しかし、経済主専攻の学生の中にも、言語学習適性の高い学生は一定数存在する。完全選択にしていてはせっかくの言語学習適性を発見できない。今後は１経や総政でも初習外国語が選択必修になれば、東洋経済の中国語教育は更なる効果を上げることができるだろう。

３．４．中国語の授業に対する評価

国経１年生は「中演Ｉ総」と「中演Ｉ文」の２科目週２こまが選択必修であるが、５コースを除いて２こまの担当教員と教材は異なり、授業内容や学習進度は独立している。履修者はこの教育体制をどう考えているのだろうか？また筆者の授業スタイルをどう評価しているのだろうか？本節では東洋経済の学生の中国語の授業に対する評価を分析する。

質問．中国語２こまの授業の連携に対する評価

【項目16】２こまが同一教員でなくても良い。

【項目17】２こまが同一教材でなくても良い。

表10．中国語２こまの授業の連携に対する評価（２択回答）

	１コース（27人）	３コース（22人）	４コース（31人）	成績上位（23人）	成績中位（25人）	成績下位（31人）
項目16	22人（81%）	17人（77%）	23人（74%）	20人（87%）	22人（88%）	20人（65%）
項目17	16人（59%）	８人（36%）	18人（58%）	17人（74%）	14人（56%）	11人（35%）

表10は項目16～17に対して「はい」と回答した学生数をコース毎、春学期末試験の成績毎に示したものである。１経、国経再、総政は週２こま共に履修している学生がほとんどいないため、国経の調査結果だけを開示している。

まず項目16「２こまが同一教員でなくても良い」と答えた学生は、いずれのグループでも７～８割である。自由記述欄には「２こまとも同じ先生でウマが合わないと、両方とも単位が取れない危険がある」「片方の先生が厳しいので、今年はやめた。来年やさしい先生にする」と書いた履修者

もいる。次に項目17「2こまが同一教材でなくても良い」と答えた学生は、成績上位者では74%、1・4コースと成績中位者では6割近くだが、3コースと成績下位者では35～36%に留まっている。3コースは1・4コースに比べて春学期末試験の平均点が低いことから（表4-1, 表4-2参照）、学習成果があまり上がらない履修者は教材を1種類にして欲しいと望んでいることがわかる。この結果は、教材選定を成績下位者が消化できるものへ見直さなければならないことを物語っている。

資料1．中国語の授業に対する感想

【成績上位】

・配布教材にピンインの規則や文法がのっていてわかりやすい。

・たくさん書いたり、読んだりするので力が付く。

・何度も声を出して読むため、自然と単語が身についていた。

・教材に同じ構文が繰り返し出てくるので、授業内で文法、単語を覚えることができた。

・特に分かりやすかったのは、中国語の語順や文型で、勉強していて楽しかった。

・不規則に生徒を指名するので、適度な緊張感を保てる。眠くならない。

・テンポ良く進んでいく。

・毎回授業最後の小テストが復習の役に立った。

【成績中位】

・復習しやすい教材の作りになっている。

・他の先生よりしっかり授業をしてくれる。

・授業は大変だが、やれば身につく。

・少しペースが早かった。

【成績下位】

・書く動作が多く、頭にはいりやすい。

・ロジカルかつ洗練された授業構成で無駄が無い。

・授業は少し速めであったがわかりやすかった。ただ自分は中国語が好きになれなかった。

・反復しすぎる。発音が多すぎる。

・学生がやらなければいけないことが多い。大学の授業としては異色。

・つまらない。

資料1は履修者が自由に記述した「筆者の中国語の授業に対する感想」のうち、代表的なものを期末試験の成績毎に示したものである。筆者は「初習外国語における学習内容の理解、記憶、定着には反復練習が不可欠」という研究成果に基づき（詳細は竹中2005a.p68）、自分で教材を作成、同

一の単語や文型が何度も登場するよう編集し、授業では単語一覧表や教材を繰り返し音読させる。また、東洋経済の中国語は非主専攻科目ゆえ、履修者が中国語を学ぶ時間は授業および試験直前に限られるので、始業のチャイムと同時に授業を始め、終業のチャイム迄１秒たりとも間を開けること無く、大量に練習問題を解かせ、履修者を立て続けに指名して答えさせ、ピンインの読み書き規則、単語の使い方、語順を授業時間内に理解するよう、指導している（詳細は竹中2005b.、竹中2005c.p175～177、竹中2008b.p54～58）。このようにして筆者が作成した教材や授業内の説明に対しては、成績に関わらず多くの履修者が「わかりやすい」と記述しているものの、指導法や授業進度に対する評価は成績により分かれる。成績上位者は「何度も読むので自然と身に付く」「繰り返し出てくるので、授業内で覚えられた」「テンポが良い」など、反復練習の多さ、流れの速い授業を高く評価しているのに対し、中・下位者は「ペースが速い」「練習問題が多すぎる」「反復、発音練習が多すぎる」「学生がやることが多い」などと記述、指導の意図を理解していないことがわかる。

履修者の中国語力には必ず格差がある。成績上位者に照準を合わせれば、教育成果は高まるが、下位者には単位取得できない学生が増える。逆に下位者に照準を合わせれば、上位者は物足りなさを感じて学習意欲を喪失する。東洋経済の中国語教育は、履修者のレベルを逐次把握しながら、教育量や授業進度を考慮し続けなければならない。

4．分析結果の総括

以上の分析から、東洋経済の中国語履修者には以下のような特徴が見られる。

(1) 一般入試および指定校入学者は中国語学習において一定の成果を上げる。

(2) 初習外国語は、選択必修なら難易度を考慮して選択するのに対し、完全選択なら興味や時間割の都合を重視して履修する。

(3) 音読に積極的で、反復練習を高く評価する履修者は、初級中国語学習の最重要ポイントであるピンイン学習をあまり困難に感じず、中国語学習で高い成果を出すことができる。

(4) 音読、反復練習をあまり好まない履修者は、ピンイン学習、語順理解に困難を感じ、２こまの授業の教材が統一されるよう望んでいる。再履修にもなりやすい。

(5) 学習前に興味が無くても、学習後に成果が上がると、中国語に対する興味が高まる。

5．提言

以上の分析結果に基づき、東洋経済の中国語および初習外国語教育、全体のカリキュラムに対し、以下の５項目を提案する。

(1) 初習外国語の初級は１クラス20人以下にする。

(2) 音読を重視する。特に現在の学習環境（大人数クラス）の下では、毎回必ず音読を大量に行

い、全履修者にピンインの読み書き規則、語順といった中国語の基礎をしっかり身に付けさせる。ピンイン習得で躓かなければ、中・上級迄履修する学生も増える。

(3) 初習外国語の授業はコミュニケーション能力の養成に徹する。海外事情の教育は国経の「国際地域研究」といった科目に任せる。

(4) 1経、総政でも（週1こまで良いから）初習外国語を選択必修にする。言語学習適正があっても、選択必修でなければ履修せず、潜在能力に気付かない学生もいる。言語学習適正のある学生を発掘し、中・上級迄履修させれば、東洋経済の初習外国語教育は更なる成果を上げることができる。

(5) 時間割設定時の配慮。現在のカリキュラムの下では、初習外国語を1経や総政の学生も履修しやすい曜日・時限に設定することで、履修者増、言語学習適正のある学生の発掘を目指す。

【参考文献】

川島隆太2004.『脳と音読』、講談社現代新書

竹中佐英子2005a.「記憶モデル理論から見た中国語発音教育のあり方」、『目白大学心理学研究』第1号、p61～72

竹中佐英子2005b.「目白大学人文学部「中国語1・2」の授業に関する一考察」、『目白大学高等教育研究』第11号、p131～139

竹中佐英子2005c.〈日本学生的汉语病句辨析〉、『目白大学人文学研究』第2号、p171～182

竹中佐英子2008a.「中国語の学習成果を左右する要素の分析」、『目白大学人文学研究』第4号、p229～241

竹中佐英子2008b.「読解教育の考察」、『中国言語文化論叢』第10集、p47～70

竹中佐英子2009.「中国語学習者に関する一考察—明治学院大学と目白大学の比較—」、『カルチュール』第3巻第1号、p211～221

竹中佐英子2011.「中国語学習者に関する一考察（二）」、『カルチュール』第5巻第1号、p271～282